

Contents

特集：スーパーチューズデーを超えて	1p
<今週の”The Economist”誌から>	
”George Bush’s last grandstand” 「ブッシュ最後の大舞台」	7p
< From the Editor > 草の根民主主義	8p

特集：スーパーチューズデーを超えて

2008年の米大統領選挙予備選は、歴史に残る激戦となっています。これで長く続いたブッシュ時代にリセットボタンが押されるわけですから、候補者選びが白熱するのも無理からぬことでしょう。しかし、全米50州中22州が開票するスーパーチューズデーを過ぎて、なおも決着がつかないとは驚きで、ヒラリー対オバマの死闘は、夏の党大会までもつれるかもしれない、という声さえ聞かれる有り様です。

その一方、ブッシュ大統領は静かに任期中最後の一般教書演説を終えました。これから先の米国には難題が一杯。さて、今後の展開はどうなるのでしょうか。

かつてない寂しい一般教書演説

今や「クリントン候補の夫」として扱われているビル・クリントン第42代大統領は、今を去ること8年前、大統領として最後の一般教書演説を行った。2000年1月28日の”States of the Union”は、途中で128回の拍手により中断があり、全体で89分もかかった。クリントン大統領は米国経済の繁栄を次のように自賛した。

”My fellow Americans, the state of our union is the strongest it has ever been.”(国民諸君、わが国の現状は、いまだかつてなく強力であります)

”In 1992, we just had a road map; today, we have results.”(1992年にあったのは地図だけでしたが、今日、われわれは成果を得ています)

”We have crossed the bridge we built to the 21st century.”(われわれはいま、21世紀への架け橋を渡り終えたのです)

2期8年の任期を終える大統領としては、是非ともこんな風に自らの成果を誇りたいものである。が、それからちょうど8年後の2008年1月28日、ブッシュ大統領はまことに低姿勢な最後の一般教書演説を行うこととなった。

全体で要した時間は53分間。冒頭からして、ブッシュらしくない、自省的で抑制された言い回しであった。

Seven years have passed since I first stood before you at this rostrum. In that time, our country has been tested in ways none of us could have imagined. We faced hard decisions about peace and war, rising competition in the world economy, and the health and welfare of our citizens. These issues call for vigorous debate, and I think it's fair to say we've answered the call. Yet history will record that amid our differences, we acted with purpose. And together, we showed the world the power and resilience of American self-government.

当日、テレビカメラが追い回したのは、壇上のブッシュ大統領ではなく、聴衆の中に含まれている上院議員たちだった。エドワード・ケネディがバラク・オバマと話し込んでいくところへ、ヒラリー・クリントンが挨拶をした。ところがオバマはそれに気づかず、振り向きもしなかった。民主党の重鎮であるケネディは、直前にオバマ支持（Endorsement）を明らかにしたばかりであり、これは3者の微妙な関係を浮き彫りにするような光景だった。つまり、メディアの関心は「ポスト・ブッシュ」に向けられていたのである。

米大統領選挙には「時代をリセットする」機能がある。大統領が変わると、米国はまるで違う国になってしまう。ビル・クリントン時代が今とはまるで違って感じられるように、ポスト・ブッシュ時代は今とまったく違う姿となるだろう。そして11月4日には新大統領が決まり、来年1月20日には第44代大統領の政権が発足する。これでは現職大統領が何を言っても、聞き手の心は上の空になってしまう。

思えばブッシュ時代の米国は、さまざまな安全保障上の危機を迎えてきた。同時多発テロ事件があり、イラク戦争があった。ハリケーン・カトリーナの襲来は、米国内の意外な脆弱さを暴き出した。エンロンの破綻により、企業の情報開示の信頼性が揺さぶられることもあった。また石油価格の上昇は、国民生活にとって大きな負担となった。

にもかかわらず、2001年から2007年までの米国経済はおおむね高い成長率を示してきた。その好調な経済が、昨年夏からサブプライム問題によって危うくなっている。米国民の関心事も、「イラク」から「経済」へと移り変わりつつある。これでは、ますます「次の大統領」を気にしなければならなくなる。

そして今週、予備選挙は序盤戦の天王山を迎えた。

「決戦の火曜日」の回答～共和党編

2月5日は、全米22州で予備選挙と党員集会が一斉に行われる「スーパーチューズデー」だった。

全米 50 州のうち半分近くが参加するのであるから、普通はこれで勝負がつきそうなものである。特に 50 州の中には、カリフォルニア、ニューヨーク、イリノイ、ニュージャージー、ジョージアという多くの人口を抱える州が含まれている。日本で言えば、東京、大阪、愛知、神奈川、福岡を含む 22 都府県が開票するようなものだと考えると分かりやすいだろう。ところが共和、民主両党とも、実に含蓄のある結果が出たのである。

共和党

- ・ マッケイン：アリゾナ、カリフォルニア、コネチカット、デラウェア、イリノイ、ミズーリ、ニュージャージー、ニューヨーク、オクラホマ (ttl:602)
- ・ ロムニー：アラスカ、コロラド、マサチューセッツ、ミネソタ、モンタナ、ノースダコタ、ユタ (ttl:201)
- ・ ハッカビー：アラバマ、アーカンソー、ジョージア、テネシー、ウェストバージニア (ttl:152)

共和党は、上記 5 大州のうち 4 つを手中に収めたジョン・マッケインの文句なしの勝利であった。ミット・ロムニーは、地元マサチューセッツ以外では、人口の少ないロッキー山岳州を押さえたのみで、これでは先の希望が見えてこない。案の定、2月7日に撤退宣言となったが、勝敗を分けた陰の功労者はマイク・ハッカビーである。

ロムニーの戦略は、保守票を奪って中道寄りのマッケインを苦しめることであった。ところが保守票は自分ではなく、宗教右派のハッカビーに流れてしまう。ハッカビーは地元アーカンソーのみならず、南部諸州を手堅くまとめ上げ、「南部で勝てる候補者」であることを印象づけた。南部の動向は、毎回、大統領選挙の勝敗を左右する。マッケインが党の指名を受けたときに、ハッカビーはみずから高く売ることができるわけである。

共和党が悩んで出した答え

それくらい、マッケインは共和党保守派の評判がよろしくない。いわく、ブッシュ政権の財政法案や、同姓婚を禁止する法案に反対した。不法移民に甘い移民法改革を支持している。民主党と組んで選挙資金規制法を通したが、そのお陰で共和党は企業献金が入りにくくなった。中絶や銃規制への反対、保守派の最高裁判事指名といった課題にも積極的ではない。要するに保守の心が分からない裏切り者である、というのである。

もっともマッケインは、ブッシュ政権のもっとも評判の悪い政策、イラクへの増派を一貫して支持している。そのために昨年夏には選挙戦が失速状況になり、一時は選挙資金にも事欠くありさまだった¹。それでも自説を曲げないストレートさが、中道派や無党派層に人気があるゆえんであるのだが。

¹ 昨年未時点でも、マッケインの選挙資金は4110万ドル（うち3815万ドルを消費済み）。これはロムニー（8850万ドル）やジュリアーニ（6093万ドル）はおろか、エドワーズ（4386万ドル）以下である。

そもそも 2008 年の共和党有力候補は、保守派から見ると心許ない顔ぶればかりであった。多少、デフォルメして表現すると以下ようになる。

- ・ ジョン・マッケインは「**反・保守**」である。いちいち保守本流の神経を逆なでする。一匹狼タイプであるから、そのことをまったく気にしていない。
- ・ ミット・ロムニーは「**偽・保守**」である。モルモン教徒であり、社会政策ではリベラルなのだが、出馬のために方向転換している「風見鶏保守」である。
- ・ ルディ・ジュリアーニは「**亜・保守**」である。ニューヨーク出身でリベラル。その分、ネオコンをアドバイザーに大量登用して、「タカ派ぶりっ子」でごまかしている。
- ・ マイク・ハッカビーは「**聖・保守**」である。保守の心を理解しているものの、元は牧師さんだけに浮世離れしたところがあり、とても大統領候補の柄ではない。

これでは誰を選んだものか、彼らの悩みは深い。心から応援できそうな候補者は、ブッシュ政権とともに沈んでしまったり、ジョージ・アレン前上院議員のように 2006 年中間選挙で落選してしまっている。自信喪失気味の共和党にとって、2008 年の大統領候補指名は「自分探しの旅」といった色合いがある。

悩んだ末の結論は、「反・保守」のマッケインということになりそうだ。保守派としては、満を持して送り出したブッシュが散々な評価となった後だけに、この結論を渋々ながら受け入れるのだろう。ただし、彼ら在必死でマッケインを応援する可能性もないではない。それは民主党の候補者が、彼らが大嫌いなヒラリー・クリントンとなる場合である。

「決戦の火曜日」の回答～民主党編

対照的に、民主党は 2 大候補がまことに甲乙つけ難い結果を残した。

民主党

- ・ ヒラリー：アリゾナ、アーカンソー、**カリフォルニア**、マサチューセッツ、**ニュージャージー**、**ニューヨーク**、オクラホマ、テネシー (ttl:790)
- ・ オバマ：アラバマ、アラスカ、コロラド、コネチカット、デラウェア、**ジョージア**、アイダホ、**イリノイ**、カンザス、ミネソタ、ミズーリ、ニューメキシコ、ノースダコタ、ユタ (ttl:767)

ヒラリーはニューヨークやカリフォルニアなどの大きな州で勝利し、順当に獲得代議員数を増やした。オバマも故郷イリノイや南部のジョージアを押さえるとともに、限られた資源を効果的に投入し、重点州を確保した。アッパー層が多く住むコネチカット、いつも混戦の末に「勝ち馬」を当てるミズーリなどである。誤算といえば、エドワード・ケネディの支持にもかかわらず、マサチューセッツで勝てなかったことぐらいだろうか。

こんな風がいい勝負になってしまうと、互いに1億ドル以上の選挙資金を集め、スタッフや支持者も大量に得ているだけに、容易に撤退はできない情勢である。レースがどんな形で決着するのかわからない不透明であり、最悪、「8月の党大会までもつれる」という見方さえある。それでは共和党との決戦を前に、双方が疲弊してしまう恐れもある。

単純に代議員数を比べると、指名獲得に必要な代議員数は2025であり、スーパーチューズデー終了時点でヒラリーは1033、オバマは937である。文字通り紙一重の差といえる。しかし選挙の影響を受けない党幹部たちの票、いわゆる「スーパー・デリゲーツ」が463票あり、うち193人がヒラリー支持、103人がオバマ支持を表明している²。民主党内では、過去にクリントン夫妻に世話になっている人が多いので、この分はどうしてもヒラリーが有利となる。

しかしオバマは、スーパーチューズデー前に支持が急伸しており、勢いがある。最近ではオバマに対し、「プロセスやプログラムではなく、ムーブメントの政治家」という評価もでてきた。アル・ゴア、ビル・リチャードソンなど、ヒラリー支持を表明しても不思議がない顔ぶれが沈黙しているのも、この勢いを警戒してのことだろう。

通常の年の予備選挙においては、真面目に獲得代議員数を比べたりはしない。ある程度差がついたところで、勝ち目のない候補が敗北宣言をし、「これからは　　さんを応援します」と、勝者を称える。それを皆で拍手して、**最後はただ1人の候補者の下で党が団結する、というのが予備選挙の「お約束」ストーリー**なのである。

2008年はその筋書きが実現しそうにない。それではこの先、どうなるのか。以下のような可能性が考えられる。

- (1) どちらかが規定の代議員数を獲得するまで、**地道に予備選を消化する**場合。この場合、次の山場はテキサス、オハイオ、バーモント、ロードアイランドの予備選が重なる3月4日となりそうだ。
- (2) **第三者による「調停」**が行われる場合。ただし民主党では、両陣営に「顔」が効く人物が見当たらない。ひとつの可能性として、26人の代議員を獲得しつつ戦線を離脱したジョン・エドワーズの今後の言動が影響力を持つかもしれない。
- (3) **資金ショート**が起きる場合。オバマ陣営は活発なネット献金により資金が潤沢だが、大きな組織を抱えているヒラリー陣営は意外と資金がタイトである。ヒラリーは今週、500万ドルの「自己資金」を投入したことが話題になった。
- (4) **応援団に「幻滅」が生じる**場合。ヒラリー陣営は「プロ集団」なのでその可能性は低いだろうが、「アマチュア集団」であるオバマ陣営は、何かの弾みで支持者が急激に去っていくことも考えられる。いずれにせよ、今後の選挙戦で生じる予想外の事件が、両候補の明暗を分けることになりそうだ。

² <http://www.cnn.com/ELECTION/2008/primaries/results/scorecard/#D>

ヒラリー対オバマの勝者は？

あらためて振り返ってみると、スーパーチューズデー後の二大政党は奇妙な相似形をしていることに気がつく。共和党は迷った末に、「党の基盤」を代表する候補ではなく、「反保守」ないしは「超党派」のマッケインを選出しつつある。そして民主党は、「党の基盤」を代表するヒラリーと、「超党派」のオバマの間で意見が割れている。

それでは民主党は、どちらを選ぶべきなのだろうか。

本誌がかねてから指摘してきた通り、2008年大統領選挙のテーマは、ブッシュの退場とともに米国が二極対立から融和、もしくは再統合に向かうことであろう。大きく揺れた振り子が元に戻るのは、米国政治特有のリズムである。だとしたら、次の大統領は「党の基盤」ではなく「超党派」を目指す人物でなければならない。

共和党側は、間もなくジョン・マッケインという答えを出す。外交・安保でタカ派、社会政策で穏健派というスタンスを持つマッケインは、米国政治の現状において有力なソリューション足り得る。つまり「テロとの戦い」ではブッシュ路線を継承するが、経済政策や社会政策は大きく変える。政治手法も超党派で行く、ということだ。

ブッシュ政権は敵味方をはっきり分けて、なるべく「51対49」で法案を通そうとした。つまりなるべく妥協を少なくし、味方を喜ばせ、敵を悔しがらせることをもって良しとした。こうした政治手法が長く続いたために、ワシントンでは煮詰まった二極対立ができてしまった。2008年大統領選挙は、この状況をリセットするチャンスである。

仮にヒラリー・クリントンが大統領になるようならば、党派的对立の時代に"Four More Years"を与えることになりかねない。「党の基盤」の上に立つ彼女は、ブッシュ時代に対する報復に打って出るだろうし、共和党側も本気でそれに反撃するだろう。かくして、「米国版・薔薇戦争」がさらに延長されてしまう。

ゆえに民主党が候補者として選出すべきはバラク・オバマであろう。というより、「対立から融和へ」を真正面から訴えている彼こそが、2008年大統領選挙の主役たるにふさわしい。彼の著書"The Audacity of Hope"（邦題『合衆国再生』）の第1章は、「二大政党制の弊害」で始まっている。「アメリカはひとつ」であることが、オバマの最大の主張である。そして、人種の違いを乗り越える困難に比べれば、党派の違いなど小さいはずだ、という彼の主張には説得力がある。

さらに言えば、民主党がヒラリーを送り出すことは、共和党の保守派を「マッケイン支持」で団結させることになるので、「お得」な選択ではない。

そんなわけで、2008年大統領選挙は「オバマ対マッケイン」が望ましいというのが本誌の見通しである。この場合、どちらに転んでも日本外交にとって悪くない、というのはあくまで偶然の所産である。

< 今週の”The Economist”誌から >

”George Bush’s last grandstand”

Lexington

「ブッシュ最後の大舞台」

February 2nd 2008

* 注目度がとても低かったブッシュ大統領の最後の一般教書演説。これから先の米国政治はどうなっていくのか、という”The Economist”誌の分析です。

< 要旨 >

判事たちは黒尽くめで、将軍たちは勲章をつけ、着飾った議員たちは抱き合ったり叫んだり。一般教書演説は、米国政治の妙な作法の最たるものである。大統領が報告すると、誰もが立ち上がって熱狂的に拍手する。大統領は自党に向かってご褒美を差し出し、議場の半分だけが喝采する。閣僚を喜ばせれば閣僚が立ち上がり、他の者たちは困惑する。

昔からこうだったわけではない。合衆国憲法は、大統領が「ときどき議会で国の状況を語る」ことを求めている。ワシントンとアダムズは議会で演説し、ジェファソンは面倒がって手紙で済ませた。演説が復活したのは1913年のウィルソンからだ。ゴールデンタイムの放映や、大統領夫人の傍にセレブが並ぶのは、今日のテレビ時代の産物である。

この間のブッシュは大きく変わった。2001年2月の初演説では温情ある中道派を名乗り、スペイン語で締めてみせた。その次は戦士ブッシュだった。2002年は悪の枢軸を弾劾し、2003年はイラク侵攻を正当化し、2004年には大量破壊兵器を語った。2005年には社会保障改革と移民問題、自由を世界に広げると大きな政策課題を掲げた。

ところがブッシュの国内改革は頓挫し、テロとの戦いは迷走。景気刺激策とイラク増派の継続を訴えたが、景気対策は超党派で進行中だし、増派は後継者次第である。支出拡大への戦いを宣言したが、彼自身が膨大な利益誘導法案にサインしている。メディアの注目は、オバマがケネディ上院議員と話し中で、ヒラリーに気づかなかったことに集まった。

残りの任期期間、ブッシュにはすることがない。民主党議会は彼に構う暇がない。レーガンやクリントンのように、外交で汗をかくこともないだろう。共和党を喜ばせ、民主党を困らせるのがブッシュ政治だった。これからはブッシュ後の政治をどうするかが肝心だ。

オバマとヒラリーはほとんどの政策で大差がない。新時代の政治手法で意見が違ふ。オバマは党派政治そのものを終わらせたい。レーガンのように政治のムードを変えたい。ヒラリーは会社を救う新CEOのつもりで、党派政治云々は戯言だと思っているらしい。

右派の方が悩みは深い。派閥間のみならず、基本哲学で対立がある。ブッシュを守るために、これまで放置してきた難問だ。レーガン時代に戻るべきか？保守主義は地球温暖化を包摂するか？信仰の役割とは？選挙に負ければ不協和音が始まるだろう。

これらの議論によって候補者たちの中身が顕れよう。ヒラリーが正しく、オバマのローガンはブッシュのスペイン語のように空虚かもしれない。保守派はブッシュのやり方を踏襲するのが自己防衛の道と知るかもしれない。今はただ成り行きを見守るばかりである。

< From the Editor > 草の根民主主義

かなり昔のことですが、あるバージニア州選出下院議員のパーティーに参加したことがあります。日本の政治家のパーティーとは違い、手作りの気さくなあつまりでしたが、会場の出口に、「あなたはXX議員のために何ができますか？」というアンケートがあったことが印象に残っています。

いちばん簡単なのは「クルマにバンパーステッカーを貼る」で、そこには“Vote XX”と記されたステッカーが山積みになっていました。次に「20ドルを献金する」とあり、金額はそこから少しずつ高くなっている。最後に「ボランティアに参加する」とありました。

傍にいた政治コンサルタントに聞いてみました。

「1人20ドルじゃ、集めても意味がないでしょう？」

すると相手はこう言いました。

「別にお金が欲しいんじゃないんですよ。あなただって、誰かから20ドルもらっても、すぐに忘れてしまうでしょう？ところが、人は自分が20ドル払ったことは絶対に忘れません。献金した有権者は、次の選挙でかならず投票してくれます。だから20ドルもらうんです」なるほど、と感心しました。政治献金とは、政治に参加するための入り口なのか。

オバマ上院議員は今年1月だけで、3200万ドルを集めたそうです。ネットなどを通して献金に応じた人数は実に22万人。一人当たり平均145ドルということになります。中には大口もあるでしょうから、大部分は「薄く広く」集めたクリーンなお金でありましょう。22万人の多くは、今週の火曜日にオバマ候補に投票したはずです。

国民が直接、大統領を選ぶ米国のシステムでは、「自分たちの大統領」になります。なるほど、それだったら2000円くらい払ってもいい。多少の失敗は大目に見て、偉大な指導者に育つのが見たい。そんな風に思う日本人は、少なくないような気がします。

* 次号は2008年2月22日（金）を予定しています。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問合わせ等は下記までお願いします。

〒107-8655 東京都港区赤坂6-1-20 <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4954

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com